



Title	福岡市方言の言語変化と維持
Author(s)	平塚, 雄亮
Citation	大阪大学, 2012, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/59374
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【29】

氏 名 平 塚 雄 亮

博士の専攻分野の名称 博 士 (文 学)

学 位 記 番 号 第 2 5 3 3 7 号

学 位 授 与 年 月 日 平成 24 年 3 月 22 日

学 位 授 与 の 要 件 学位規則第 4 条第 1 項該当

文学研究科文化表現論専攻

学 位 論 文 名 福岡市方言の言語変化と維持

論 文 審 査 委 員 (主査)
教 授 渋谷 勝己

(副査)
教 授 工藤真由美 准教授 高木 千恵

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、方言接触によって伝統方言的要素の消失が進む福岡市方言において、どのような要素が非伝統方言形に置き換わり、どのような要素が伝統方言形のままで維持されるのか、高年層と若年層の談話データを用いてその言語変化と維持のあり方を記述し、それにかかわる要因を明らかにすることを試みたものである。導入部分としての第 1 部と、福岡市方言において現在進行中の言語変化の実態を詳細に描き出した第 2 部、言語の変化と維持のメカニズムを解明することを試みた第 3 部の、3 部より構成される。本文 103 頁および資料 13 頁、400 字詰原稿用紙に換算して約 350 枚の分量である。

第 1 部序論は 3 章からなる。第 1 章では、方言接触と方言の維持について、これまで行われてきた先行研究の視点や方法をまとめ、本研究の意義を述べている。また第 2 章では、福岡市というフィールドについて概観し、インフォーマントの選定方法や採用した調査法、分析に使用したデータ（福岡市方言の高年層と若年層の自然談話を収録し、文字化したもの）などについて述べている。続く第 3 章は調査結果の概要を包括的にまとめたところである。データに現れたさまざまな言語項目の実態を整理することによって、福岡市方言の

伝統方言形のなかには、(a) 高年層において消滅しようとしているもの、(b) 高年層から若年層にかけて現在進行中の変化を観察できるもの、(c) 高年層においても若年層においてもよく維持されているものに分類できることを指摘し、本論文ではこのうち (b) の高年層から若年層にかけて現在進行中の変化を観察できる言語事象が、当該方言の変化や維持のメカニズムを解明するのにもっとも適した対象であると位置づける。

第 2 部は本論であり、第 4 章から第 7 章の 4 つの章からなる。第 4 章では、福岡市方言において、標準語のデハナイ（カ）が担う意味領域を表す、標準語形と同形のジャナイ、方言形のヤナイ、若年層において頻繁に用いられるヤン、そして東京方言形と同形のジャンを取り上げて分析を試みる。その結果福岡市方言では、標準語のデハナイ（カ）がカバーする用法を上記複数形式が分担して表すようになる変化が見られることを明らかにしている。また変化の要因として、モダリティにかかわらない要素が非伝統方言形に置き換わりやすいことを指摘している。続く第 5 章では、準体助詞について、伝統的にはトが用いられてきた福岡市方言で、非伝統方言的なノヤンも用いられるようになってきているとの指摘をうけ、準体助詞のバリエーションの使用実態を観察する。具体的には、ト・ノ・ンといったバリエーションがどのような条件をもって使用されるのかを分析し、とくに若年層において、伝統方言形のトは代名詞的用法や準体句用法では使用されなくなり、ノダ文のみに使用が限定されるようになってきていること、またこの変化から、モダリティに関与しない用法に非伝統方言形が入り込みやすいという一般的な傾向が引き出せる可能性があることを指摘している。第 6 章は、福岡市方言においてパイやクサなどの文末詞が衰退するなかで、唯一、高年層から若年層にかけて広く使用される文末詞タイを取り上げて、その変化のあり方を分析したところである。分析の結果、若年層ではタイはノダ文でしか用いられなくなっているものの、そこにはタイの使用が文法的に必須である環境があり、そのことが伝統方言形の維持につながっていると指摘する。本論最後の第 7 章はアスペクトマーカを取り上げ、従来のアスペクト研究が肯定形に注目することが多かったのに対し変化という観点からはむしろ否定形に注目する必要があると述べて、その変化のプロセスを詳細に追究する。そして、アスペクトマーカは発話のなかでは肯定形で使用されることが多く、否定形で使用されることはあまりないこと、また否定形では動作継続／結果継続がいずれもトランひとつで表されるようになりつつあること、などの要因が、伝統方言的な否定形ヨラン・トランの衰退につながっていることを明らかにしている。

第 3 部第 8 章は結論である。ここでは第 1 章で行った展望と照らし合わせながら、第 2 部の分析をもとに方言の変化と維持の要因を総合的に考察する。そして福岡市方言の伝統方言的な要素が維持されやすい条件として、(1) 伝統方言形と非伝統方言形が意味用法を分担して棲み分ける場合、(2) モダリティにかかわる形式である場合、(3) 伝統方言形を失うと不適格文が生じる場合、(4) 他の伝統方言形と共起する場合、の、4 つがあることを指摘し、まとめとしている。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、福岡市方言を使用する高年層と若年層、二世代の自然談話データを分析する

ことによって、当該方言に変化が起こっているところ、また変化が起こらずに伝統方言形が維持されているところを指摘し、そのような実態をもたらした要因を明らかにしたものである。具体的には、福岡市方言において変化が進行中の言語項目のなかから、標準語のデハナイ（カ）相当形式、準体助詞、文末詞タイ、アスペクトマーカの4つの項目を取り上げて、データのなかで使用されたそれぞれの項目のバリエーションを整理し、また高年層の実態と若年層の実態を比較することによって、その変化のプロセスを丁寧に描き出すことに成功している。またそのなかで、本論文が注目した文法面の変化には、複数形式の意味の対立関係、他の形式との共起のありかた、モダリティにかかわる度合いなどが重要な要因として関わっていることを指摘した。今後この分野においてまず参照されるべき、現時点でもっとも包括的な研究に仕上がっている。

ただし、問題点がないわけではない。たとえば、本論文は福岡市方言の文法事象の変化と維持のあり方を追究することを主な目的としているが、そのためには高年層と若年層のもつ文法体系をできるだけ包括的に描き出しておく必要がある。しかし、本論文が使用したデータは自然談話が中心であったために、データに現れていない部分については体系が描き切れていないという問題がある。また変化の要因として指摘したところも、たとえば単純否定形の「食ベン」が維持されるのに対してアスペクト否定形の「食べヨラン」が維持されないのはなぜかといった取り上げられた事象間の関連についての配慮が不十分であること、本論文で指摘された変化や維持の個々の要因が、ある事象には関与するが他の事象には関与しないのはなぜか、あるいは、どの要因がどの要因に優先して当該事象に関与するのかなど、要因間の階層性に関する議論が十分でないこと、といった問題もある。

このようにいくつかの問題点は残されているが、これらはむしろ、今後の発展のための課題として捉えられるべき性質のものであって、福岡市方言における言語変化と維持のメカニズムを詳細に明らかにした本論文の本質的な価値を損なうものではない。よって本論文は、博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。